

『学級力』の向上を目指して

～リーダーの養成とPDCAを活用した学級経営の取組～

太田市立藪塚本町中学校

寺内 昭浩

1. はじめに

現代は、情報化、国際化、価値観の多様化など、激しく変化する社会の中で、たくましく生きていく生徒、すなわち「生きる力」を育成することが強く求められている。本県でも、「生きる力」の育成のために組織マネジメントを導入し、効果的・効率的な教育活動を展開することを重要視している。

この組織マネジメントは、達成目標を明確にし、その目標達成を目指すと共に、評価・改善を繰り返し、「組織」として自律し、絶えず質の高い教育への向上を期するものである。そのためには、組織にPDCA(マネジメントサイクル)を取り入れ、目標実現に向けて効果的・効率的な教育活動を展開することが必要である。

本学級(平成18年度2年生 男子21名 女子18名)においては、学級内組織が機能していないため民主的な運営がされていない。そのため、一部の力の強い生徒中心に学校行事の活動等が行われ、生徒一人一人の思いや願いが反映されず、学級組織として自律していない。

そこで、学級経営の取組に、このPDCA(マネジメントサイクル)を取り入れ、リーダーを養成すると共に、生徒一人一人の思いや願いを生かした生徒自身の手による学級生活を運営することで「自治能力」を育て、学級を組織として自律させようと考えた。すなわち、『学級力』を高めることによって、居心地がよく、落ち着いた生活が送れるようにしようと取り組んだ実践をまとめたものである。

2. 学級の実態

(1) 生徒の実態(4・5月)

何事においても一部の力の強い生徒中心に学級が運営されている。力関係が確立していて、おとなしい子は自己主張することが少なく、力の強い生徒に気を遣いながら生活している傾向がある。また、学級委員や班長が学習やその他学級の諸活動において活躍する場面が少なく、集団としての組織が機能していない。清掃活動などもまじめに取り組む生徒も多いが、その生徒たちの思いや願いが学級に生かされていない。

1年次の体育祭などの学校行事も、学級をまとめるため、一部の力の強い生徒を上手く中心にさせて取り組んできた。要するに、既存の人間関係を崩せないでいるため、生徒一人一人にとって居心地のよい集団となっていない。

授業においても、意欲的に取り組む姿勢が身に付いていない生徒が数名いて、私語、出歩き、抜け出し等、授業を成立させるのが困難な状況の時もあった。また、生活指導を繰り返し行うことも多く、落ち着いた学級生活とはなっていない。

(2) 保護者の意識(家庭訪問より)

家庭訪問では、学級の現状を説明し、保護者の理解と協力を求めた。その中のある保護者からは、「藪塚中は、おとなしくて真面目な生徒が損をする学校ですよね。」と忘れられない一言を言われた。多くの保護者が今の現状に満足しているわけではなく、少しでも、落ち着いて学習や生活ができる学校、そして貴重な中学校3年間を充実した日々を送ってほしいと願っていることを痛感した。

3. 学級力を高めるための方策

「自治能力」を育てるためには、適切な場や機会を生かして、生徒の自発的・自治的な活動が十分生かされるように指導・援助することが大切である。生徒は、自ら挑戦したいと考える「課題」には「意欲」を持って、その解決のために「努力」する。しかし、教師が与えた「課題」には、意欲を持って立ち向かわないことがある。教師が与えた「課題」は、生徒にとって、ただ単に「押しつけられた」ものでしかない。生徒が自分で決めたものは、すべて「解決すべき課題」ということである。したがって、学級の現状を的確に把握させ、どう「課題」を生徒に持たせるかが指導のポイントになる。今の現状に満足せず、常に課題意識を持って生活するようになるためにも、定期的に評価活動をさせ、そこから「課題」を見い出させ、「改善」を図らせる指導が大切である。

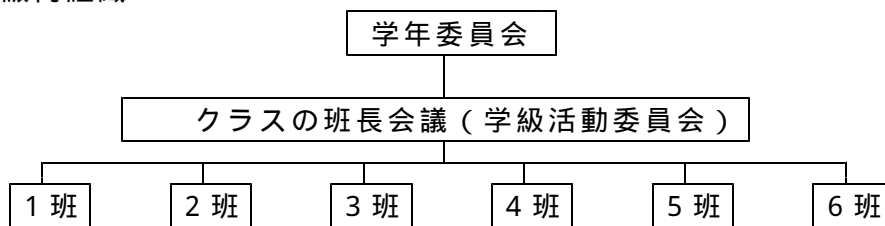
また、リーダー養成については、「リーダーは待っていても現れてこない、リーダーとは育てるものである。」こうした考えにそって、班活動の中で班長の指導力を高める指導にも力を注いだ。生徒の思いや願いを大切にし、その実現に向けた活動を取り上げたり、どんな小さな成果でも正しく評価したりして、自信や意欲を持たせることを大切にしたりした。班長を経験して良かったという思いが残るような評価を行うことが大切であると考えたからである。

このような考え方を学級経営の基本理念として、班編成から始まり、清掃活動や給食当番、学校行事など、様々な活動を通して、班を中心とした運営を行った。そして、常に生徒の思いや考えを生かしつつ、様々な活動において、P(計画)・D(実践)・C(評価)・A(改善)を繰り返しながら、より質の高い集団活動になるように取り組んだ。

(1) 学級内組織の確立

学級を一部の力の強い生徒たちではなく、民主的に組織として機能させようと考えた。そこで、まず班活動を導入し、学級内組織を確立した。そして、班長たちに常にクラスの生活上の課題意識を持たせ、学級を自分たち自身で運営させて「自治能力」を高めようと考えた。

< 学級内組織 >



(2) リーダーの養成

リーダー(班長)としての自覚と責任を培うために、学級・班の生活の様子を定期的に評価させ、その解決のための手だてを考えさせ、実行に移した。生徒たちの考えが活動内容に生かされたとき、生徒たちの意欲が喚起され、主体的な活動が展開され班活動が活性化する。また、リーダーも自覚と責任を持って取り組むようになる。

定期的な班長会議の開催

- ・毎週木曜日の放課後開催を定例とする。
- ・学級や班の生活の様子、現状についての話し合い。
- ・様々な企画の計画・準備・評価・改善策を検討する。

クラスの現状についての評価

- ・学級生活評価表の記入

(日常生活上の6項目<朝の会・清掃・給食・帰りの会・授業・協力性>についての評価)

クラスの重点目標の設定

- ・評価表より課題を見出し、次週の重点目標を決定する。
- ・重点目標の継続、変更を検討する。

生徒の発想を生かした企画の実施

- ・清掃チェックカード、合唱コンクール計画表などを検討・作成する。

(2) 一人一人の意識改革

望ましい集団を作るために、決して今の現状に満足することなく、「自分たちのクラスを少しでも良くしよう。」という意識を一人一人に持たせるために、班長たちと話し合いながら様々な活動を取り入れた。そして、一人一人の意見をできるだけ学級の活動に生かせるように心がけた。

班活動の導入(一人一役の活動、クラスのためにできること、所属感・連帯感の育成)

学級目標の具現化(学級目標に合わせた個人目標の設定と定期的な自己評価、意識化を図る)

各行事におけるアンケートの実施(課題を明確にし、次の行事へ生かす)

(3) ゴールのイメージ化(キーワードの設定)

最後に、2年3組をどのようなクラスにしたいのか。今のままでいいのか、生徒に問いかけ、一人一人がクラスの大切な一員であること、そして、自分たちの力で居心地のよいクラスにしていこうとする意欲を持たせるためにゴールを意識させる。

「どんなクラスにしたいか。」をアンケート調査実施し、結果をもとに3つの学級目標の中の特に大切にしたい項目を「思いやり・協力」とした。そして、クラスのキーワードとして教室に大きく掲げた。

同時に、担任の願いも伝え、クラスの合い言葉として教室掲示して常に意識できるようにした。

『このクラスで、本当に良かったと思えるようなクラスにしたい。』

アンケート『どんなクラスにしたいか。』

<アンケート結果> (複数回答あり)

「思いやり・協力」 20人

<内容> ・助け合える ・協力できる ・いじめのない ・認め合える
・思いやりのある ・支え合える ・友達の気持ちを考える

「学習・授業」 15人

<内容> ・授業に集中 ・授業とのけじめをつける ・私語を慎む
・意欲的に取り組む(発言など) ・目標を持つ

「積極性・明るさ」 9人

「健康・安全」 2人

キーワード決定 『思いやり・協力』

担任の願い：ALL FOR ONE ONE FOR ALL

教室掲示、合い言葉へ

(みんなが一人のために 一人がみんなのために)

生徒たちも声を上げるようになってきた。やがて、重点目標も授業から清掃へと変更していくことになった。

清掃チェックカード導入（1月から）

大きな行事（体育祭・合唱コンクール）も終わり、クラス全体の活気が減りつつある中、清掃活動が協力して出来なくなっている。そこで、班長達の発案により「清掃チェックカード」を活用することとなった。なお、清掃担当の先生方にもチェックしてもらうこととした。清掃時の役割分担を明確にし、教室掲示をした。また、毎日の評価表を定期的に集計して、各班ごとに課題を見出し班員に理解を求めた。ここでも、班長たちの地道な活動が実を結ぶことになる。

第1回教室改造計画の実施

1学期末、壁紙がはがされていたり、教室にゴミが落ちていたりすることが多いことから、班長たちから「もっと、教室をきれいにしたい。」という意見が出された。自分たちでどんなことができるかを考え、計画・実践した。班長たちの呼びかけに賛同した14人の生徒と共に、「壁紙張り」「ロッカーのペンキ塗り」の作業を夏休みに実行した。自分たちの手で苦労して行ったことから、2学期から壁紙が破られたり、掲示物を張り替えたりすることはなくなった。そして、この活動は他のクラスも巻き込んだ冬休みの第2回目の活動へと繋がっていくことになる。

<壁紙張り>



生徒たちの思いに賛同し、無償で協力してくれた業者さん

<ロッカーのペンキ塗り>



第2回教室改造計画の実施

冬休みを目前に控え、班長以外の生徒たちから「冬休みも教室をきれいにしたい。」という声が聞こえてきた。今回はさらに多くの生徒が参加し、「ガラス磨き」「壁のペンキ塗り」の作業を冬休みに実行した。学年全体へと広がったこの活動は、生徒たちが生き生きと活動する姿を生み出したのである。

<教室の壁のペンキ塗り>



<教室のガラス磨き>



< 特別教室の壁・ロッカーのペンキ塗り >

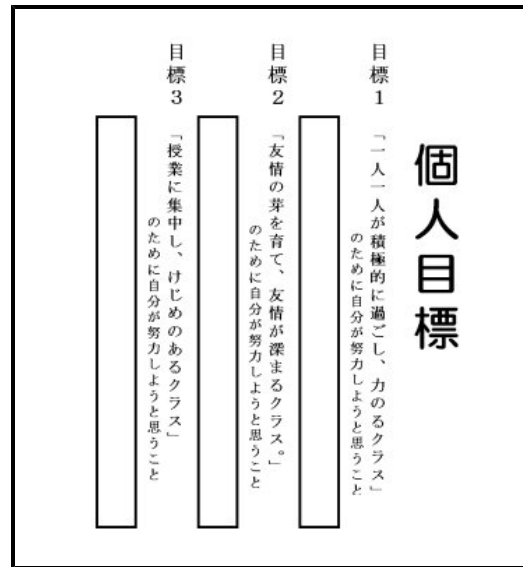


(2) 一人一人の意識改革

学級目標の具現化と定期的な自己評価

生徒達の思いや願いを込めた学級目標を「絵に描いた餅」にしないためにも、3つの学級目標に合わせて、個人目標を設定させた。学級目標を達成するために、一人一人が取り組むべき内容を明確にして学級生活を送ることを通して、学級の一員であるという存在感を持たせるようにした。

そして、定期的な自己評価より、個人の課題を見出させ、よりよく生活を改善することを意識して学校生活を送れるようにしようと考えた。



体育祭・合唱コンクールの実践を比較して(アンケートの実施・分析・改善)

体育祭(既存の人間関係をそのままに)

今までの人間関係をそのままに、男子は力の強い生徒が中心となり活動する。その一方、女子は班長が中心となり活動しつつある。

男子...無謀な練習計画や一方的な選手決定、何度も自分の意見を言った方がいいと助言しても、文句を言わないまじめな生徒達。

これでいいのか、絶対に満足しているはずがない、憤りを感じる。

忘れられない班長A君の一言

『先生、B君達が中心でやっている自分勝手にダメだよ。みんな我慢しているんだよ。だからまとまっているように見えるだけだよ。』

そこで、体育祭アンケート集計・考察(班長会議)

アンケート項目 (クラスのキーワード関連)に注目!

「なんと、半分以上の生徒が悪い評価をつけた」

どうする? ↓ 班長達に投げかける。

『やっぱり、おまえ達が引っ張るしかないだろう』

いざ、合唱コンクールへ

合唱コンクール（班長を中心に組織として取り組む、既存の人間関係をぶっ壊す）

- ・心強い校長先生の応援「やりたいようにやってみろ！」
- ・指揮者、伴奏者、パートリーダーを班長が自ら行う。
- ・練習計画はみんなの意見を聞きながら、班長会議で検討決定、クラスへ伝達。
また、音楽の先生に今のクラスの現状を聞きながら、パート練習か、全体練習なのか、次週の練習計画に修正を加える。
- ・一部の生徒は自分たちの思い通りにならないため、なかなか参加できず。それでもリーダー達が声を掛け続けた。少しずつ心を開いてきたため、練習に参加し始める。しかし、時すでに遅し。
- ・女子は班長中心によくまとまり、いいハーモニーを奏でる。
- ・男子は、・・・でも、班長のがんばりに対して労をねぎらう。

優勝することは出来なかったけれど、

当日、意欲的に気持ちよく参加できた生徒がほとんど(31人)

体育祭・合唱コンクール自己評価集計表(抜粋)

< 評価 > 4...とてもよくできた 3...よくできた 2...ややできなかった 1...できなかった

自己評価項目	評価(人)			
	上段(体育祭)		下段(合唱)	
	1	2	3	4
クラス全体のまとまり(協力)はよかったか。	1 1	1 6	8	4
	1	1 4	1 6	5
練習しているときのクラスの雰囲気はよかったか。	9	1 9	9	2
	3	9	1 8	6
練習に気持ちよく参加できましたか。	5	1 4	1 6	4
	1	6	2 0	9
当日は、意欲的に気持ちよく参加できましたか。	5	1 0	1 7	7
	1	4	1 3	1 8

5. まとめ

この一年間の様々な取組の成果が徐々にではあるが、実を結んできた。三学期頃から授業も落ち着いて取り組むようになり、また、清掃活動なども主体的に取り組むようになってきた。班長を中心とした生徒達の思いや願いが、多くの生徒の心を動かしたと感じる。問題行動のある生徒達も、教師の忠告には反発するが同じ生徒からのアプローチには心が動く。生徒指導が大変になればなるほど、教師は何とかなければと奔走するのである。だから疲れてしまうのである。もっと生徒の力を信じ、生徒と共に「いい学校、いい学級」作りに取り組むことが大切だと考える。生徒は、生徒にとっても自分が所属する学級がよいにこしたことはないのである。その気持ちを大切に、諸活動に生かすことである。問題行動のある生徒への指導と同様、リーダーの養成やまじめに取り組んでいる生徒への指導を充実させ、一人一人の生徒を成長させると共に、集団の力、すなわち『学級力』を高めることが問題行動のある生徒も巻き込んで、望ましい集団が形成されることになると考える。

学級経営の取組は、まさに特別活動の中核に位置づけられると考える。特別活動の特質

は、望ましい集団活動を通して、自主的・実践的な態度を育てることにある。この目標を達成するためには、生徒が様々な活動に取り組みながら「自治能力」を身に付けることが最善策であると考えられる。

この「自治能力」を育てるためには、以下に示すようなことが大切である。

- ・常に、生徒に学級生活上の課題を見出させる手だてを実践すること。
- ・生徒の思いや願いを学級経営に生かすこと。そして、温かく見守ること。
- ・教師も一緒に思い、考え、悩むこと。そして、願いを伝えること。

また、生徒の発想を生かした様々な活動に取り組むときには、P D C Aに添った活動を繰り返して実践することによって、より質の高い教育活動になると考える。この取組こそが、生徒一人一人を成長させ、学級を「組織」として自律させるのである。ひいては、学級目標の実現に結び付いていくのである。

しかし、学校生活である以上、教師の適切な指導下での自治であることを忘れてはならない。

6. 最後に

学級担任を任されてから、リーダーを養成し、学級を「組織」として成長させることを念頭に置いて学級経営に取り組んできた。生徒達と共に担任としても大きく成長できたと感じている。年度当初、同僚に「学級崩壊の危機だ。」と忠告された。しかし、最後には「先生のような手法で学級を落ち着かせたのを初めて見ました。大変参考になりました。」と賛辞を送られた。そして、何よりも失敗するかもしれないこの実践を理解し、温かく見守っていただいた今井英雄校長先生には心から感謝している。今後もこの実践を生かして、さらに新しいことにも挑戦しながら教育活動に取り組んでいきたい。

<参考文献>

- ・中学校学習指導要領 解説 特別活動編 (文部科学省)
- ・中学校特別活動指導資料『指導計画の作成と指導の工夫』(文部科学省)
- ・中学校特別活動指導資料『指導の改善と評価の工夫』(文部科学省)
- ・学級活動読本(教育開発研究所)
- ・『学校組織マネジメント』研修 木岡一明 (教育開発研究所)
- ・『これからの学校と組織マネジメント』 木岡一明 (教育開発研究所)
- ・特別活動研究 (明治図書)